
『名探偵コナン ～暁への導き（リード）～』

真知歌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『名探偵コナン ～暁への導き（リード）～』

【Nコード】

N0210Z

【作者名】

真知歌

【あらすじ】

歩美の見た不快な夢から始まる嫌な事件…組織の仕業なのか！？まさか帝丹小学校にまで事件の波が来るとは誰も思っていなかった。「組織の仕業ならもう手遅れね、あの子達を救うことはできないわ…」

「バー口…俺はまだ蘭に話さなきゃなんねえことがあんだよ…」

あの謎の女探偵も登場…！

突如姿を現した赤井秀一…その想いは？

そして、遂にコナンの正体が蘭にバレてしまう…！？更に魔の手が蘭にも伸びる…その時コナンがとつた行動とは…？「新一、ありがとう」

大阪の高校生探偵服部平次も登場！「和葉、お前は俺の初恋の相手やで？」この言葉の本当の意味とは…？

絶対に見逃せない『名探偵コナン ～暁への導き(リード)～』

少年探偵団たちがとつた行動…

それは幸か不幸か…。

奇妙な少女（前書き）

またまた来ました真知歌です！

毎度ありがとうございます（* *）

今回はシンゴさんと亜由美さんのリクエストを交えて作らせていただきました！

是非楽しんでください！

感想まってまーす（笑）

奇妙な少女

「ハアハアハア……」

現在午前8時半

快晴の空の下でこんな穏やかな日とは正反対に青ざめた表情でランドセルを背負い駆ける一人の少女がいた

その少女は帝丹小学校へと入っていき自分の教室のドアを勢いよく開けるや否や思いつきり叫んだ

「助けて!!!!!!」

教室にいたクラスメイト達は当然意味不明な表情をしている

その内の4人は更に驚いていた

そして叫んだ少女はその4人の姿が目に入り4人の内の一人にこう言った

「どうしよう…助けて、コナン君!!!!!!」

そう言われたコナンは目をぱちくりさせながら

「どうしたの歩美ちゃん?」

そう、朝からパニック状態の人物の正体は吉田歩美だった

「どうしたんです？歩美ちゃん」

「ちゃんと飯食ってきたか？顔色悪いぜ？」

同様に光彦や元太も心配する

「もしかしてなにか事件でもあったのかしら？」

歩美のただならぬ表情を見て軽い冗談でそう問う灰原
だがまさかの返答だった

「うん！事件よ事件！大事件！！」

歩美の“事件”という言葉に思わず反応するコナン

「なに！？まさか殺人事件か！？」

嫌な予感

すると歩美は

「違うよ！そんなんじゃないやなくてもっと大変なの！！」

コナンと灰原の頭には一瞬嫌な予感がし互いに顔を見つめ合ったが次の歩美の発言に思わず目が点になる

「夢だよ！夢見たの！コナン君と哀ちゃんがキスしてる夢！！」

「へっ…？」

少し顔が赤らめるコナンと灰原

「あ、歩美ちゃん？なぜそんな夢を見てしまったんでしょうか？」

光彦も目が点になり少々焦る

「分かんないけど、コナン君と哀ちゃんが抱き合ってキスしてたの！！」

動揺しているかと思えば徐々に怒り出す歩美

「大丈夫よ、そんなこと現実的にありえないから」

そう一言灰原が言うとコナンは横目で睨む
すると灰原は不気味に笑う

「そっか、なあ〜んだ、そっだよね!！」

といきなり笑顔になった歩美

どうやらこの事件は解決したようだ

すると担任の小林先生が教室に入ってくる

クラスメート達は皆席につこうとする

そして椅子に座りながら灰原がコナンに一言告げる

「悪夢はこれから嫌な事が待ち構えているサイン…」

「はあ?」

「私は何度見たことか…」

ボソツとそう呟く灰原をコナンは見つめる

「な〜んてねっ」

コナンに向けて冗談だとゆう顔をする灰原だがその表情は何処か不安でいっぱいだった

(こんな天気の良い日に事件なんか起きないわよね…)

(ましてや組織だなんて… 考えすぎね…)

序章 PART・1

教室の窓から快晴の空を見上げ灰原はそう思った

「え〜と今日は一時間目に国語のテストをします」

小林先生のその発言にクラスメート達は皆ブーイングだ

もちろん元太や光彦や歩美も

「酷すぎますよ予告もなしに〜」

「そつだよ勉強する時間ないよ〜」

「実力を試すテストです」

小林先生はウインクしながら皆にそつ言つと更にブーイングが起きた

8

「んだよ、俺朝飯いっぱい食っちゃまって眠いから寝ようと思ってたのによ〜」

「元太君、それはちょっと違う気がするんですけど…」

そうしているといつの間にか朝の会終了のチャイムが鳴った

教室内では急いで勉強する者や最早諦めて遊んでいる者達がいた

そんな中で探偵団の三人は文句を言っていた

「もお〜コナン君どう思う?」

ふいに歩美がコナンへと問い掛けた

「えっ?俺?... まあ〜実力つてのも大事だしいいんじゃないか?」

「え〜コナン君も小林先生の味方なの?」

「えっ?味方ってゆうか...」

答えに詰まるコナンを三人は真っ直ぐに睨んでいた

「随分余裕なのね?まるで他人事ね?」

困っているコナンの後ろから灰原がからかいながらそう言う

序章 PART・2 黒い闇

そうしているうちに一時間目の授業開始のチャイムが鳴り響いた

「あーあ、やだな…」

「仕方ありませんね…」

「腹減ったな…」

探偵団の三人は仕方なく席につこうとした

…その時

コナンの教室の前を見たことのない40代くらいの男性が通りかかった

「ん？」

コナンは新任か生徒の親かとも思ったが次の瞬間嫌な予感が脳裏を横切った

(フフフッ…)

その男性は確かにコナンを見て不適な笑みを漏らした

(!!?)

コナンは驚きその男性を強く睨んだ

男性は教室の前を過ぎどこかに消えたがコナンの心の内は不安でいっぱいだった

その理由は以前、黒づくめの男達の仲間コードネーム『アイリツシユ』と戦った時にコナンの指紋付きの粘土が盗まれていたことがあった…

そう…、3日前から行方不明のコナン愛用の蝶ネクタイ型スピーカー…

蝶ネクタイ型スピーカーの脱衣は基本的に着替える時、稀に出先で外すこともあるが大抵は毛利探偵事務所か阿笠博士の家だ

3日前の夜も記憶のうちでは阿笠邸で蝶ネクタイ型スピーカーを外したはず…だが今日になっても見つかっていない

蝶ネクタイ型スピーカーのほうは阿笠博士が作り直してくれてはいるがコナンの心では黒い闇が訪問しに来ていた

序章 PART・2 黒い闇 (後書き)

前回と同じような手は使わないと思ったがコナンは不安にかられていた

(もしまたあいつらの仕業だったら… 今回はやべえぞ…、蝶ネクタイ型スピーカーは確かに博士ん家で取ったはず…)

(それをあいつらがまた盗みに来たとしたら俺の居所やたぶん灰原の居所もバレちまつてる…)

(そして俺や灰原の正体までもが…)

今の今までコナンは蝶ネクタイ型スピーカーを何処かでなくしきつと何処かに置いてあるだろう、もし誰かが拾っても不思議なネクタイを興味本意で持ち帰ったり又捨てたりするだろうと思っていたがその考えは一変し恐怖に陥っていた

闇への突入（前書き）

コナンは焦った様子で椅子から立ち上がり小林先生に告げる

「先生！俺体調悪いから帰るね！！」

小林先生が止める間もなく教室を出ていく

「おいコナン！」

「ずるいですよコナン君！」

「全然体調悪そうに見えないね」

元太や光彦、歩美は不思議に思ったがすぐに三人はどうせテストが嫌になって仮病を使って帰ったのだろうと推理した

コナンのただ事ではないような表情を見た灰原は

「先生、私も体調が優れないから帰るわ」

「そ…そうなの？気を付けてね…」

小林先生は灰原が醸し出すオーラに触れられずあっさりと帰宅を許した

「哀ちゃんまで行っちゃったね」

「灰原さんも仮病でしょうか」

「せ、先生俺も腹の調子が悪いんで…」

「元太君！それはただの食べ過ぎです！」

元太も流れに乗って帰ろうとするがそこは光彦が強く突っ込んだ

闇への突入

「ちょっと!どうしたのよ?」

不気味な男性の存在を知らない灰原はコナンの後を走って追いかけて呼び掛けた

コナンは立ち止まり何かに気付いたように後ろを振り返り灰原にこう聞いた

「おめえ、さっき変な感じしなかったか?」

「え?どうゆうこと?」

灰原に先程の事を言うのは戸惑ったがもし黒ずくめの男達の仕業なら一刻を争うと思いまだ言っていなかった蝶ネクタイ型スピーカーのことも全てを灰原に話した

…ってことなんだ、もしあいつらの仕業で俺を狙ってるとしたらここにいるのは危険すぎる…」

それを聞いた灰原の顔は青ざめた

「そうね…あの子達を巻き込むのは避けなければならない」

「かといってあなただけが狙われているとも限らない、あなたの正体がバレたとしたら私の正体もバレているわ、そうしたら組織は血眼になって私を見つけ出し私の周りの人間共々殺しに来るわ…」

「ああ……」

コナンはゴクリと唾を飲んだ

(蘭……)

そんな様子を見た灰原はもう一言告げた

「でも……、もし組織の仕業ならもう手遅れね……」

「！」

「今頃私達の周りの人間を調べ尽くしている頃よ……そうなるとすればあの子達を救うことはできないわ……」

暁の想い

いつになく弱気な灰原…

そんな灰原に近寄りコナンは灰原の胸ぐらを掴み物凄い剣幕でこう言った

「ぜってえに殺さねえ！！！！あいつらも…蘭も… おめえも！！！！」
「必ず俺が守ってみせる！！殺されてたまるか！！！！」

灰原は正直驚いた

だがこんな時に少々ドキッとした自分が許せなかった

(何考えての私…)

(『逃げるんじゃねえ…、自分の運命から逃げんじゃねえ』)

あの時のコナンの言葉が蘇る

「とりあえず博士ん家に行くぞ」

「ええ」

コナンに促され灰原も阿笠邸へと向かった

その頃帝丹高校では

「ねえねえ、見て蘭」

そう言いながら園子はストラップを見せる

「かわいい〜！なにそれ？」

「真さんとお揃いの〜」

「へえ〜上手くいつてるんだ！」

「お陰様でね！」

「そっか！良かったね！」

園子にはやけ顔から真顔になり蘭に尋ねた

「蘭は？」

「えっ？」

「新一君と何かお揃いの物ないの？」

「私？私は…別に恋人同士ってわけじゃないし…」

「ええ〜！！！？まさかまだ返事してないわけ？」

園子の言う返事とは以前ロンドンで新一に告白された時の返事だ

「まったく早くしないと誰かにとられちゃうよ！はいはい、すぐ返事しなさい」

そつゆつと半ば強引に蘭の携帯を取り上げて新一へと発信する

仕掛ける罠

阿笠邸

突然帰ってきたコナンと灰原に驚いた博士

コナンは博士に一部始終を打ち明けた

今博士はコナンに頼まれた組織の仲間、シャロンすなわちベルモットの情報をファンに紛れ込みパソコンで検索している

そんな中コナンと灰原は二人で考え込んでいた

すると新一用の携帯が鳴り響いた

着信画面を見るとそこには“蘭”と表示されていた

何かあったのかとコナンは急いで電話に出た

「もしもし？蘭か？」

博士に再度至急で作ってもらった蝶ネクタイ型スピーカーカーを手にとりながら

すると電話口の相手は蘭ではなかった

『私、園子！』

「園子…？蘭に何かあったのか！？」

『そうそう！大ニュースよ！ はい蘭』

そう言うと園子は携帯を蘭に返す

『もお〜園子ったら〜 あっごめんね新一……』

会話のやり取りから特に何も事件のない様子が伺えたコナンは

「わりいな、蘭…ちょっと今事件が立て込んで、また電話する！」

そう言うとコナンは電話を切ってしまった

「そんなに冷たくしていいの？」

流石に見兼ねた灰原が口を挟んだ

「…今はそれどころじゃねえ」

「……」

するとコナンは再び顎に手を添えながら真剣な眼差しで考え込み出
した

仕掛けられた罠

「もお〜何なのよ！もう絶対電話してあげないんだから！！」

園子はまただめだったのかとガツカリする

「まあそんなこと言わないでまた電話してあげなよ？」

「うん…」

蘭は切なそうにそう答え、ふと窓の外に目をやった

そこには帝丹高校の校門の前に見たことのあるような人物が立っていた

「あれ？あの人…」

(黒のニット帽…！?)

「ん？どした蘭？」

そこには赤井秀一が立っていた

赤井は蘭が自分の存在に気付くと素早くその場を退散した

「なにしてたんだろ…」

思わずボソツと呟く

（『訳なんているのかよ？人が人を殺す理由なんて知ったこっちゃねえけど…人が人を助ける理由に論理的な思考なんて存在しねえだろ？』）

赤井を見た蘭は新一のあの時の言葉が頭に蘇った

「FBI…」

その時に赤井が着ていたコートの背中に書いてあった文字も思い出し口にした

そしてその様子を蘭と園子の隣で蘭に借りたノートの書き写しをしていた世良はしっかりと見て聞いていた

（……………）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0210z/>

『名探偵コナン ～暁への導き（リード）～』

2011年12月2日00時46分発行